## 250　中央大学実業講話会

〔『法学新報』第19巻11（226）号　明治42年12月1日〕

○中央大学実業講話会　中央大学商科を中心とし同経済科学生諸氏と合同して講師、学員諸氏の賛助により奥田博士を会長に久米良作、田中文蔵の二氏を副会長に戴き諸先輩の講話を聴聞し学術の研究と同時相互の懇親を目的として実業講話会を設立せしか去月二十五日午後五時より校内倶楽部に於て其第一回を開催したり奥田会長は先つ起て開会の旨趣を述へ副会長久米、田中の両氏を一同に紹介せられ次に田中文蔵氏登壇して「今日の日本は東西文明の折衝地に当り邦人の最も注意を要すへき時なることより現下商業教育の兎角形式に流れて実際と離隔し易きを実例に依りて懇篤に説述し本学学生は飽までも実際の人たらん覚悟を要す」る旨を勧告せられ次に久米良作氏は一場の経歴談を為し「母校を出ててより父の膝下に農桑に従事し岡山事務所員となり次て春木座の経営に任し同座烏有に帰して一万円の資金を一夕に蕩尽し日本鉄道会社定款改正に当り総会に於て意見を陳へしか縁となりて同取締役となり九年間其事業に尽瘁せしか同会社も三十九年国有の際資本倍額一億三千万円を以て買上けられ今は東京瓦斯会社取締役たりとの径路を訓戒的に面白く述へられ結論して学問は事業家の肥料てある学生中真面目に学業に従事すへきは勿論終世学問と離るへからす諸君の此世

に処するや此学問の力によりて熱心身命を惜ます其向上を期せは何事か成らさらん」との旨を述へられ次に東京農工銀行取締役中山佐市氏は自分は学校卒業以来真面目に実直に働て亦他を顧みす今日まて突進したりとの冒頭にて大蔵省に二十円の属官たるより所所を流浪して今の銀行か全国の模範農工銀行として設立せ(ママ)るると云ふことて遣て見る気に為り幸に今日の所にては好成績を挙くるを得たり若し学生諸君にして忠実に学課を終了して正直に真面目に仕事をせらるる以上到る所て歓迎し少くとも久米君、田中君及自分等の手許にても諸君の入るる余裕は十分ある偏へに諸君の努力を希望すとて例の快弁を振はる時既に八時を過きたれは中島講師を始め稲木重俊、岩崎鉄次郎、伊沢芳造、武田明、足立唯一郎、三宅碩夫の諸氏出席せられしも他の講演は次回に譲りて晩餐を共にし学生諸氏の種種の余興あり喝采の声湧くか如く一同散会せしは午后十時を過くる頃なりし

（幹事報）